

【資 料】

キュプリアヌス著  
『デメトリアーヌスに送る  
——キリスト教弁明の書』

CYPRIANUS AD DEMETRIANUM;

APOLOGETICUS

——翻訳と注解——

吉 田 聖

目 次

I. 注解

1. 本書の題名：Ad Demetrianum, Apologeticus について
2. 本書の作成目的，著作の時期等について
3. 本書の今日的な意義について

II. 翻訳

キュプリアヌス著『デメトリアーヌスに送る——キリスト教弁明の書』

1. これまで沈黙を守ってきた主な理由
2. 種々の災いの原因をキリスト教のせいにするには，黙っておられない
3. この世界の衰微や栄枯盛衰は世の定め，神の法則，自明のこと
4. 人間の老化現象や世界の衰退を，キリスト教のせいにしてはならない
5. 種々の災いは，唯一の神を礼拝しないことからくる神の怒りの現れ
6. 唯一の神に従うことを戒めている聖書の言葉
7. 大自然の異常現象，悪疫等は神の懲らしめ
8. 人の奉仕を求めておきながら，自ら神に奉仕しないのはおかしいこと
9. いくら災いが起きても，回心して神に立ち帰ることをしない
10. 様々な矛盾をかかえている自分を，素直に見つめ，裁いてみなさい
11. すべての悪行が，合法的なものであるかのごとく振る舞う
12. 偶像礼拝者こそ，真の神を礼拝する者を不当にも迫害している

13. 自由に信仰告白している私を、なぜ拷問にかけないのか
14. あなたの礼拝する神々が偉大であるなら……
15. あなたの神々にも審判の時が訪れ、すべてが明らかになる
16. 神を知るために、まず自分自身を知りなさい
17. 種々の意外な出来事は偶然の出来事ではなく、神の復讐である
18. 未来によいものを確信する人々は、今の悪や苦しみに悩まない
19. 今の災いにあわてず、動揺しない理由
20. この世の悪や不幸に耐える信仰と希望
21. 誰も自ら誇ってはならない
22. 審判の日に滅びることを免れる人々とは
23. たとえ遅ればせながらでも神を求めなさい
24. 最後の時を迎える、信仰者の喜びと不信仰者の嘆き
25. 激励の言葉

## I. 注解

### 1. 本書の題名：Ad Demetrianum, Apologeticus について

Demetrianus デメトリアヌスというのは、個人名である。文章の大半は「あなた」、すなわち「2人称単数形」を使用しているので、本書は、一見、論文ではなく書簡のようにも見える。キュプリアヌスの全著作は「論文集」と「書簡集」の2種類に分類されているが、本書はその内容からみて「論文集」の目録中に掲載されている作品である。

他にも、『フォルトゥナトゥスに送る——殉教のすすめについて』（98年2月『南山神学』第21号、115～158頁に邦訳発表）、『ドナトゥスに送る』（未邦訳）、『クリリヌスに送る』（未邦訳）等には個人名が付けられているが、内容的にみて「論文」扱いとされている。このデメトリアヌスという人物は、キュプリアヌスの全著作中、本書に2回（1章3；2章30）、いずれも呼格形「デメトリアヌスよ」として登場するだけで、他の著作には全く見受けられない。デメトリアヌスについては、一般の歴史・人名辞典等にも掲載されていない。

本書の「原注」作成者 Steph. Baluzius ステファノ・バルジウスによれば、

彼は異教徒で、当時、アフリカ北部の行政を司る総督 (Proconsul) であつたらしい。というのも、この人物の職務名については、異説があり、「カルタゴ市の裁判官」、または裁判を行う際に取り仕切る「顧問の一人」であつたといわれているからである（「原注①」参照）。デメトリアヌスは、キリスト教に猛反対する立場から、当時頻発していた戦争・飢餓・疫病等の原因は「キリスト教徒が異教の神々を礼拝しないためである」という持論を一方向的に展開していた。

これに対してキュプリアヌスは、本書の冒頭部分（第1章参照）で述べているように、このような一方向的な反対論に対して「忍耐と沈黙をもって無視してきた態度」を改めている。キュプリアヌスはデメトリアヌスの偏見に満ちた考え方やその攻撃に対して、哲学的考察を加え、ことごとく反駁している。それと同時に、聖書の教えを根拠に据えながらキリスト教が「戦争・飢餓・疫病等の原因ではないこと」を弁明し、キリスト教信仰を擁護するために、本書を彼宛てに書いたのである。

底本 Migne 版のラテン語原文には、タイトルの Ad Demetrianum「デメトリアヌスに送る」のすぐ下に、ラテン語で Apologeticus（「護教」または「弁明」という意味）の単語も併記されている。これがキュプリアヌス自身の記入であるかどうかは分からない。人名デメトリアヌスだけでは、一見しても本書の内容が理解されにくいと思い、翻訳に際しては、上記の Apologeticus という単語に「キリスト教」をさらに補足して、「キリスト教弁明の書」と付記することにした。全体は25章から成っており、各章には小見出しが付いていなかったため、内容を紹介する意味で簡潔に小見出しをつけることにした。なお、今回の翻訳に際しては、枚数制限も考慮に入れて、ステファノ・バルジウスの原注⑨箇所を中心に簡潔に紹介し、訳者の脚注は極力控え目にした。

## 2. 本書の作成目的、著作の時期等について

本書は、キュプリアヌスの司教叙階後 4～5 年経過した、西暦 252 年頃の

作とされている。その前後の状況を概観してみると、およそ次の通りである。異教徒の修辭学者としてカルタゴ市で活躍していた青年キュプリアヌスは、チェチリアーヌス Caecilianus 司教との出会いによって改宗にまで導かれ、自分の財産の大部分を貧しい人々に施して、洗礼を授かった。そして、西暦 248 年末（あるいは 249 年始めに）司祭に叙階され、しばらくして、民衆の熱意によって、同年、カルタゴの司教に選ばれた。その後は殉教する 258 年 9 月まで約 10 年間、まさしく行動派司教として、信徒の司牧や教会の一致のために数々の著作をもって具体的に教え導き、教会会議を開催し、問題解決のために活躍した。

司教に叙階された翌年（250 年）、ローマのデキウス Decius 皇帝（249～251 在位。キリスト教に対する組織だった迫害を最初に行った皇帝）の迫害が起きた当初は、自らの殉教によって教会が指導者を失うことを恐れ、一時的に隠れ家にこもって、そこから教会を指導した。迫害終了後、迫害による多数の棄教者に対して、長期間の厳密な償いの後に教会復帰を認めようとしたキュプリアヌス司教は、代願書の提出をもって無条件復帰を求めた人々に反対した。このような厳格な態度は、助祭フェリチシムス Felicissimus とその党派の人々に、教会離散の口実を与えることになった（252 年頃の対立司教はフォルトゥナトゥス Fortunatus）。251 年 3 月カルタゴの司教会議によって離散者は排除され、棄教者問題は妥協によって解決した。252～253 年、ローマのガッルス Gallus 皇帝（251～253 在位）の迫害と、これと時期を同じくして起きた恐ろしい悪疫の流行の間に、償いの規定は教会会議によってさらに緩和されるようになった。このような内外の困難な時期にあって、キュプリアヌス司教は、キリスト教に反対論を唱えるアフリカ北部の行政官デメトリアーヌス総督宛てに本書を書いて、キリスト教の弁明を試みているわけである。その意味で、具体的な教えであり、また時宜を得た高著であると言えよう。

### 3. 本書の今日的な意義について

フランススコ・ザビエルによるキリスト教伝来 450 年経過した日本において、カトリック教会信徒総数は、現在、総人口約 1 億 3 千万人中、わずか 44 万 1841 人(1998 年度。前年度から 71 人減。『カトリック新聞』第 3532 号, 1999 年 7 月 18 日付参照), 50 万人 (0.4%) にも及ばない状態で低迷している。ちなみに、信徒の共同体を中心に 215 年前 (1784 年) に生まれた、同じアジア圏の韓国カトリック教会ではソウル教区信者数が教区内の総人口 1226 万 2602 名に対して 125 万 3392 名 (10.22%) に達したという (『カトリック新聞』第 3525 号, 1999 年 5 月 30 日付参照)。

そこで、西暦 252 年頃のキュプリアヌスの著作『デメトリアーヌスに送る——キリスト教弁明の書』が、約 1747 年経過した現在、日本の教会内外の人々に対して、どのような今日的意義を持っているかを次に考察してみたいと思う。

まず、日本人について考えてみると、現代日本における大学生や大学教育関係者の中には、熱心な信徒もいれば、宗教に無関心な人もいる。歴史的なキリスト教の姿——たとえば、人種・民族がらみの紛争・戦争の火種となり信徒間で殺戮が繰り返されてきたアイルランド紛争や、今も繰り返されているコソボ紛争のことなど——に置く学生も少なくない。さらに、東京や松本あたりでサリン無差別殺戮事件を起こしたオウム真理教の独善的な教説に、何故か魅力を感じて入信する若者もいれば、あの事件が世間に与えた衝撃と新興宗教のマイナス・イメージが影響して、あらゆる宗教的な事柄に敏感になり、嫌悪感を抱く人も皆無とは言いきれない。

反面、マザー・テレサ (1997 年 9 月 6 日死去, 87 歳) のような、神の愛の宣教者に親しみと敬愛の心を抱く人々も多く、コルベ神父 (1941 年 8 月 14 日死去, 47 歳) のような、自分の命を犠牲に差し出す大きな隣人愛の姿に感動を覚える人々もいて、その死後も伝記や著作物に人気が集まっている。

他方、現実問題として、毎日、身近に出会う学校当局者やキリスト教徒

(聖職者を含む)の教職員の言動ややり方に直面して、「口では隣人愛を説きながら、何も実践していない」などと、批判的な立場を取る人もいるのは事実。しかし、反発的な態度をとっていた大学生の中から、卒業後、何年も経ってから洗礼を受け、熱心な信者になるケースも稀ではない。洗礼、それは人間の側からみれば種々様々な出会いで始まるようだが、究極的にはやはり神からの「先行的な恵み」によるものではないだろうか……。

ところで、日本の信徒数低迷と八方ふさがりの現状打開に向けて教会関係者は何をすべきか。「人々の批判はすべて誤解や無理解によるものだ」と簡単に決めつけたり、退けたり、無関心を装うことはできない。むしろ、種々の批判に対して、謙虚に耳を傾けるべきである。特にキリスト教を基盤にした教育事業に携わる教員は、次代を担う若者に、「分かりやすい言葉で」、正しい情報を伝えていく責任がある。

そのためには先ず、過去の歴史としてのキリスト教を謙虚に見直し、長所・短所の両面から再評価し、弁明し、分かるように教えること。次に、現在および未来のキリスト教の使命の一端として、世界の平和と幸福に貢献できる「国際社会人の育成」に励むこと。さらに、カトリック信徒各人が自分の言動を反省し改め、日常生活・霊的生活の向上、行動力のある信仰の育成等に励むことが不可欠である。結局、信徒一人ひとりがキリストの愛に生かされ、魅力あふれるキリスト者となってこそ、深い人格的な交わりを通して影響を与え、やがて時が満ちて信仰に導かれるというケースも増えていくことであろう。

このたび、南山大学が創立 50 周年を迎え、その学術記念論集『南山神学』第 23 号にキュプリアヌスの本書『デメトリアーヌスに送る——キリスト教弁明の書』を紹介できることは意義深いことであると思う。当時の社会と現在の日本社会の状況は、たいへん異なっているが、キリスト教に対する環境や人々の反応には似通っている面も多く見受けられる。キュプリアヌス司教が本書で展開している教説がそのまま現代日本人に受け入れられるとは限らないが、キリスト教の信仰を具体的に述べて弁明している点で

は、少なからず参考になるのではないかと思う。

時代の流れとニーズに対応しながら学部・学科を増設し5学部15学科に発展してきた南山大学は、50周年にあたり、21世紀に向けてさらなる充実をはかり、2学部新設と既存学部改組等をもって大きく変わろうとしているが、大学の理念「人間の尊厳のために」HOMINIS DIGNITATI（ラテン語）と共に、南山大学の存在意義を根拠付けるキリスト教精神はいつまでも変わることはない。本書は、キリスト教信仰について反省・確認・激励の契機となるだけでなく、多くの人々に示唆を与え、役立つ教えが含まれていると確信する次第である。

（以下、II. 翻訳につづく。）

## II. 翻訳

キュプリアヌス著

『デメトリアーヌスに送る

——キリスト教弁明の書』<sup>①</sup>

### 第1章 これまで沈黙を守ってきた主な理由

デメトリアーヌスよ。これまでしばしばあなたが冒瀆と不信の言葉をもって、唯一の神に対してののしりと騒がしい抗議をするのを、私は軽蔑をもってあしらってきました。それは話をして愚か者の熱狂をかきたてるよりも、沈黙して誤った者の無知を笑っている方が慎み深くもあり、よいことだと思っていたからです。しかし私は神の教え<sup>②</sup>によらずに、そうしたのではありません。それは「愚か者の耳に（何も）語りかけるな、聞いても彼はあなたの思慮深い（見識ある）言葉をあざわらう（侮る）だけだから」（箴23, 9）とあり、また「愚か者にはその愚かさ（無知）にふさわしい答えをするな、あなたが彼に似た者とならぬために」（箴26, 4）と書き記されているからです。さらに、聖なる物は自分の知識の中にとどめておいて、これを豚や犬に踏みつけられないように、外に現してはならない

とも命じられています。主はこう言われました。「神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で押しつけ（踏みにじり<sup>③</sup>、）向き直ってあなたがたを押し退ける（かみついてくる<sup>④</sup>、）だろう。」（マタ 7, 6）。

あなたはしばしば私の所へ来られましたが、それは学びたいためではなく、むしろ反対を唱えたいためであり、軽率にも（自分の）立場を固執するのがよいと考え、それを騒がしい言葉で叫びたて、私の立場は聞くに耐えないようでした。それで私は、あなたと論争を交わすのは愚かなことだと考えたのです。論議によって、あなたの狂気の沙汰を静まらせるよりも、大声で叫んで、荒れ狂う狂乱を押さえる方が確かにやさしいと思ったからです。目の不自由な人に光を提供したり、耳の不自由な人に説教したり、あるいは野獣に知恵を示したりすることは確かに空しく、何の効果もないことです。野獣は理解できず、目の不自由な人は光りを認めず、耳の不自由な人は聞くことができないからです。

## 第2章 種々の災いの原因をキリスト教のせいにするには、黙っておられない

私はこのことを考え、しばしば私の舌を押さえ、忍耐をもって<sup>⑤</sup>短気な者に勝ってきました。それは、度し難い者に教えたり、不信心な者を宗教で阻止したり、凶暴な者を温和をもって制止したりすることなど、私にはできなかったからです。しかし、それにもかかわらず、ひじょうに大勢の人たちが、戦争が頻発するようになったことや<sup>⑥</sup>、疫病、飢餓の流行、<sup>ひょう</sup>雹や大雨<sup>⑦</sup>、長い晴天<sup>かんぱつ</sup>と早魃<sup>かんぱつ</sup>などの原因を、私たちに負わせて訴えると、あなたが言われるので、これ以上沈黙を守っていることはふさわしくないと考え、私の沈黙が自分の慎み<sup>⑧</sup>よりもむしろ人々の疑いの助けとなり始めないように、従来は誤った攻撃など軽蔑をもってあしらってきたにもかかわらず、今、その罪を指摘することにしましょう。

デメトリアーヌスよ。従って、私は、あなたと共に、おそらくあなたに



煽動されたと思われる人たち、また悪意の言葉で私たちに憎しみの種を蒔いて造った、あなた自身の根から芽を出したあなたの同僚たちにも、答えない<sup>⑩</sup> と思います。偽りの欺きをもって悪に陥らされた者は、真理の説得力によって、はるかに容易に善に動かされるものですから、こういう人たちも、私の議論の合理性を受け入れるだろうと信じています。

### 第3章 この世界の衰微や栄枯盛衰は世の定め、神の法則、自明のこと

あなたは、今あげたような災いはすべて私たちのせいであるとか、今世間が悩みおののいている災いは、あなたがたの神々を<sup>⑪</sup> 礼拝しない私たちにその原因を帰すべきであるなどと、言われました。しかし、あなたは神の知識について無知であり、真理に全くといい人ですから、そのために、まず第一に、次のことを知らなければなりません。すなわち、この世界はすでに古くなり、以前に支えられていたような力をすでに持ち合わせておらず、昔持っていたような生命や力も、なくなっているということです。これについては私たちが何も言わず、また聖書や神の言葉からも、何の証明も主張もしていませんが、この世界自体がそれを示し、その弱点の証拠によって、世界の衰微を証明しています。この世界では、冬には種を養う豊かな雨が降ることはありません。夏は収穫をかばうために、太陽が余り暑く照り過ぎるということもありません。春に穀物畑が実することもなく<sup>⑫</sup>、秋に葉を茂らす草木もありません。大理石を積み上げる職人たちは、掘り尽くされて古くなった山からは、少ししか掘り出せないものです。取るに足らないほどの微量の金銀も、昔、消耗し尽くされた金属を思い出させます。そして瘦せた鉱脈は、日一日と、乱掘され（生産量も）減少していきます。

だいたい、農夫は畑で<sup>⑬</sup> 失敗し、水夫は海で、兵士は兵營で、お人よしは市場で（失敗し）、裁判は法廷で、和合一致は友情で、熟練は技術で、紀律は道徳で、それぞれ失敗するものです。あなたは、物事の本質的な性質は、老年になっても、以前の青年時代<sup>⑭</sup> そのままの新鮮さと生命力をもっ

て残るものだと思うのですか？ すべてのは終わりが近づいて衰え、必然的に弱るものです。ですから、太陽は沈みぎわにその光線と輝きが弱まり、月は傾きながら角<sup>つ</sup>のように欠けていき、前には緑の葉を付けて茂っていた木々も、枝がはびこるにつれて、だんだん実を結ばない古い木の醜い姿になるのです。また、かつてはあふれる水脈から自由に水を湧き出していた泉も、年がたつにつれて水が出なくなり、やがては少しばかりの水をしたたらせるだけになります。これがこの世の定めであり、これが神の法則なのです。つまり、すべて初めのあるものは必ず滅び、成長したものは古い、強い者は弱くなり、大なる者は小さな者となり、そして弱り衰えた時こそ、まさにその終わりが確かにやって来た時なのです。

#### 第4章 人間の老化現象や世界の衰退を、キリスト教のせいにはならない

あなたはこの世界が老いて行くにつれて衰えたことを<sup>⑧</sup>、すべてキリスト教徒の責めに帰しました。老人は年をとれば力が弱くなります。彼らは耳で聞くことでも、足の速さでも、目の鋭さでも、力の活気でも、体力の新鮮さでも、手足の完全さでも、もはや以前と同じ能力を持つことはできません。そして、かつては人間の寿命も800歳から900歳も授かっていたのですが、今では100歳になる者はまれです。これらのこともキリスト教徒の責任なのでしょうか？ 少年にも白髪のものがいます。その髪の毛は成育し始める前にすでに衰えてしまったのです。しかし生命は老年になったからといって止まるものではなく、老年から始まるものです<sup>⑨</sup>。こうして生命は生まれ出たその時から終わりに向かって急いで行くものです。

今生まれたものはすべて世界自体の老衰と共に、衰えて行くのです。全世界自体がすでに退化の過程にあり、終わりに向かって進んでいるのですから、この世界のすべてのものが衰え始めたと言って、誰も驚くべきことではありません。

## 第5章 種々の災いは、唯一の神を礼拝しないことから来る神の怒りの現れ

さらに、戦いが頻繁に起こると、死と飢餓とが人々の憂いを深め、悪疫が健康を損ない、ペストの悪弊によって人々が消耗されていくこと、これらのことについてはすでに告げ知らされているということを知っておいてください。すなわち、最後の時には、多くの人々には災いと様々な不幸が重なって起こります。そして審判の日が近づくと、人類を叱責するために、怒る神のとがめがさらに起こるはずです。これらのことが起こるのは、あなたがたの誤った不平や、真理にうとい無知が主張するように、私たちがあなたがたの神々を礼拝しないからではなく、あなたがたこそが唯一の神を礼拝しないからなのです。神は主であり、世界の支配者であり、すべては神の意志と命令によって行われるのですから、神ご自身がなさるか、あるいは、なすことをゆるされない場合は、何者もそれをなすことはできません。神の怒りを現すこれらの災いの起こったのは、確かに神を礼拝している私たちのせいではありません。それはどんな方法をもってしても神を求めず<sup>9</sup>、また神を恐れもしないあなたがたの罪の報いとして呼び下されたものです。なぜなら、あなたは空しい迷信を見捨てることもなく、すべてにすぐれた唯一の神のみを礼拝し、これにのみ祈願すべきであるという真の宗教を知るための賢明さを、持ち合わせていないのですから……。

## 第6章 唯一の神に従うことを戒めている聖書の言葉

要するに、あなたは主の言っておられることを聞きなさい。主が神の声をもって私たちを教え、同時に戒めておられるのを聞きなさい。神はこう言っておられます。「あなたの神、主を畏れ（礼拝し）、主にのみ仕えなさい」（申6、13）。さらに、「あなたには、私をおいてほかに神があってはならない」（出20、3）とあり、また「他の神々に従って行くな。彼らに仕え、平伏してはならない。お前たちの手で造った物で私がお前たちを滅ぼさないために（怒らせるな）」（エレ25、6参照）とあります。さらに預言者た

ちは聖霊に満たされて、神の怒りを主張し告げています。「万軍の主は言われる。私の神殿が廃墟のままであるのに、お前たちはそれぞれ自分の家のために走り回っている。それゆえ、お前たちの上に天は露を降らさず、地は産物を出さないであろう。私は剣（早魃）を呼び寄せよう。それは大地と山々と穀物の上に、新しいぶどう酒とオリーブ油と土地が生み出す物の上に、また人間と家畜とすべて人の労苦の上に及ぶのだ」（ハガイ 1, 9～12 参照）。

また他の預言者も同じことを言っています。「私はある町には雨を降らせ、ほかの町には降らせない。ある畑には雨が降らず、雨のない畑は枯れてしまう。二つ三つの町が水を飲むために一つの町へよろめいて行くが、渇きは癒されない。しかし、お前たちは私に帰らない、と主は言われる」（アモス 4, 7～9 参照）。

## 第7章 大自然の異常現象、悪疫等は神の懲らしめ

ごらん下さい。主は怒り、憤り、脅かしておられるのです。それというのも、あなたがたが神のみもとに行かないからです。しかし、あなたは自分の頑迷さから軽蔑をもってこれらのことを疑うか、不平を言うのです。もし異常に雨が降らなければ、地はほこりにまみれて、手入れされずに悪くなってしまうのです。不毛の畑が貧弱な、つやのない草の葉をわずかばかりしか生やさないのも、<sup>あられ</sup>霰がぶどうの木を破壊し弱めるのも、ものすごい旋風がオリーブの木を根こそぎにするのも、日照りで泉が涸れるのも、またペストの風が空気を腐らせるのも、悪疫が人々を滅ぼすのも、これらのことはすべて、それを起こすようにした罪のしわざなのです。それなのに、そのような災いも何ら得るところがなければ、神はさらに激しく怒られます。なぜなら、これらのことはみな頑迷を懲らしめたり、あるいは悪を罰するために起こるものだからです。

同じ神は聖書の中で次のように宣言しておられます。「私はわけもなしにお前たちの子らを打ったが、彼らは懲らしめを受入れなかった<sup>®</sup>」（エレ 2,

30)。そして神に献身した預言者は同じ調子で答えて言っています。「あなたは彼らを鞭打たれたが、彼らは痛みを覚えず、あなたが彼らを打ちのめされても、彼らは懲らしめを受け入れようとは望まなかった」(エレ5, 3)。どうでしょう、神から鞭を加えられたというのに、神を恐れないのです。ごらんなさい、天からの打撃と滅亡はけっして小さなものではないのに、誰もおののきもせず、恐れもしないではありませんか。もしそのような神の叱責が人間を制止できなかったなら、どうなるでしょうか？ もしそのような罪が罰せられず<sup>⑨</sup>、安泰ですませるなら、人間の横着な態度はどれほど増長していくのでしょうか？

## 第8章 人の奉仕を求めておきながら、自ら神に奉仕しないのはおかしいこと

泉の水が今は少なくなったと、あなたは苦情を言っています。空気がさわやかでなくなった、雨がたびたび降って地を肥沃にすることがなくなった、そしてこれらのことが、もはや以前のようにあなたがたを楽しませ利用させることがなくなったと、不平を唱えています。しかしあなたがたはすべての物をあなたに奉仕するようにとお定めになったその神に仕えましたか<sup>⑩</sup>？ すべての物があなたに仕えることをお喜びになる神に奉仕しましたか<sup>⑪</sup>？ あなたは自分の奴隷が自分に仕えることを望みます。しかしあなたが自分に従い、従順であることを求める(相手の)人間とあなたとは、この世に生まれたということから、同じ運命になっているのと同じく、死についても同様です。あなたは肉体的なものを望むが靈魂には共通の秩序<sup>⑫</sup>があります。あなたがたはこの私たちの世界に来たけれども、時が過ぎれば同じ権利を持ち、同じ法則に従ってそこを離れるのです。

しかも奴隷があなたの快楽に応じて仕えなければ、あなたの意志に合わせて従わなければ、あなたは彼の奉仕を取り立てる、尊大で極端な収税吏のように、彼を鞭打ち、罰するのです。飢えさせ、渇きをおぼえさせ、苦しめ、いじめて、しばしば剣や牢獄さえ用いて苦しめています。自分では

このように「主人の権利」<sup>⑧</sup> を行使しながら、あなたは自分の主である神を認めない、それは何という“みじめな人”でしょうか？

### 第9章 いくら災いがかきても、回心して神に立ち帰ることをしない

そういうわけで、種々の天災が起った理由に、神の鞭打ちと懲らしめに、足りないところはありません。しかし、この有り様では、それも何ら得るところはなく、こんな滅亡の恐怖によっても、誰一人回心して神に立ち帰らないのですから、結局、永遠の牢獄の尽きざる火、終わりなき罰が残される<sup>⑨</sup> だけです。この世での神の怒りを聞かなかつたなら、あの世での（あなたの）哀願の呻き声も聞き入れられません。彼らは主が預言者をもって、こう絶叫するのを聞かなかつたのです。「イスラエルの子らよ、主の言葉を聞け。主はこの国の住民を告発される。この国には、あわれみの心も真実も、神を知ることもないからだ。呪い、欺き、人殺し、盗み、姦淫がはびこり、流血に流血が続いている。それゆえ、この地は渴き、そこに住む者は皆、衰え果て、野の獣も地の蛇も空の鳥<sup>⑩</sup> も海の魚までも一掃される。もはやだれも告発せず、もはやだれも争わないために。」（ホセア 4, 1~4 参照）。

地上において、誰も神を認めず、誰も神を知らず、誰も神を恐れないので、怒り憤る<sup>⑪</sup> のだと、神は言われるのです。偽り、情欲、詐欺、無慈悲、不従順、怒りの罪を見て、神は叱責し、咎められるのですが、誰も回心して罪をなくそうとする者はありません。ごらんなさい、神の言葉によってあらかじめ分かっていたこれらのことが、今起っているのです。それなのに、誰も現在起っていることについて考えられた勧告に、耳を傾けないのです。霊魂がこのような、固く束縛され閉じ込められ、息もできないような、ひじょうな災いのさなかにあっても、人間はまだ悪に陥る機会があるのです。そしてそのような大きな危険も、自分に対しては他人よりも厳しくないものと考えているのです。あなたは、神の怒りということを知ると憤慨しますが、それはあたかもあなたが悪い生活をしながら、自分は

何か良い報いを受けるに値するように考え、また今起こっているような種類の災いはあなたの罪に比較して、ひじょうに大き過ぎると思っているかのようです。

## 第 10 章 様々な矛盾をかかえている自分を、素直に見つめ、裁いてみなさい

他人を裁くあなたも一度、我が身を裁いてごらんください。自分の隠れた良心を、よく見てごらんください。いいえ、あなたは自分を恥じず<sup>㉔</sup>、むしろ悪そのものを楽しみにしているような邪<sup>よこしま</sup>な人ですから、他の人々から赤裸々に見られている自分を、顧みてみなさい。あなたは誇りで得意になり、貪欲に目がくらみ、怒りに狂い、賭博で浪費し、不節制におぼれ、嫉妬し、欲情のあまり淫蕩になり、残酷で凶暴になり、こうして罰せられるべき罪の数々が、日一日と増えているのに、人間を罰する<sup>㉕</sup> 神の怒りが大きくなったと言って怪しむのですか？ あなたは敵が望んで立ち上がったかのごとく、平和の衣さえ身にまもっていれば、あなたのための平和があり得るかのよう不平を鳴らしています。あなたは外部の野蛮な人々の武力と危険が鎮圧されさえすれば、国内の有力な市民たちの中傷と悪に対する攻撃の武器は、凶暴、過酷にならないものであるかのごとく、眩いています。あなたはまた、日照りが人間の貪欲以上の大飢饉を招いたかのように、またひどい凶作がその年の産物の増加と価値の蓄積をとらえ、さらに窮乏がひどくなるかのように、不作と旱魃<sup>㉖</sup>に不平をこぼしています。

あなたがたは、天が閉ざして雨を降らせないことを眩きながら、同じように地では穀物倉庫を閉ざしているのです。あなたがたは、すでに出来た物はみな貧しい人に分け与えてしまったかのように、今の出来が少ないことを眩いています。あなたがたは天災や悪疫を咎めています。しかしその天災と悪自体によって、他人の悪行が分かったにしろ、あるいは増したにしろ、あなたがたは弱い者に慈悲を示さず、貪欲と略奪とが死の口をあけて待っている始末でした。愛の義務について臆病なその同じ者が、邪悪な

利益の追求には突進するのです。死者を忌み嫌い避けながら死のけがれを求め、あたかも病人がなおっても死を逃れることができないように、あわれな者を見捨てているように見えます。なぜなら、死者の財産を手に入れることに熱心な者は、(本当に)病人が死ぬことを望んでいるからです。

## 第 11 章 すべての悪行が、合法的なものであるかのごとく振る舞う

破滅の恐れが大きいのに、罪なく暮らす教えが与えられていません。破滅によって死んでいく人々があとを絶たないのに、そのさなかにあっても、自分自身が死すべきものであることを誰も考えていません。いたる所に分散と捕獲と占有があり、汚辱を隠すことも、手間取ることも<sup>9)</sup> ないのです。それらはあたかもすべてが合法的で、ふさわしいことでもあるかのようです。盗まない者は損をしたとか、自分の財産を損したかのように考え、こうして誰もが先を争って略奪をはたらいています。盗賊のほうが、犯罪のやり方の点で、より慎重深い者がいます。つまり、彼らは道のない溪谷や荒れ果てた寂しい所を好み、せめて自分たちの悪行が暗闇と夜に覆われて見えないような方法で悪事を働くのです。ところが(これに反して)、貪欲な者は、おおびらに、猛威を逞しゅうするのです。彼らは、市場の光(明るみ)のもとで、渴望という向こう見ずな武器をさらけ出しながらも、その横着さによって、我が身は安全なのです。欺き、毒殺し、町の真ん中で暗殺を実行し、しかも罰せられないのをいいことに、ますます悪に対して熱心になって行くのです。罪悪は犯罪人によって行われますが、それに復讐し得る罪なき人など、一人もいません。告訴人や裁判官に対する畏怖の念は、全くありません。悪人は罰せられず、おとなしい人は沈黙しています。共犯者は心配していますが、裁判をすべき者は売り物になっています<sup>9)</sup>。こういうわけで、このような事態の真理は預言者の口により、神の霊と直観力によって語られたのでした。それは、神は確実明白な方法で災いを防ぎ得るが、悪人の悪にすさんだ心は、主のもたらした助けに逆らうことを示しています。彼はこう言っています。「主の手が力なくて、お前たちを



救えないのではない。主の耳が鈍くて、聞こえないのでもない。むしろお前たちの悪が神とお前たちの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、そのあわれみを妨げているのだ。」(イザヤ 59, 1-2)。

だから、もし自分たちが苦しむに値する者であることに気がついたら、あなたがたの罪と反抗とを評価してみなさい。あなたがたの良心の傷を考えなさい。そして各自、神にも私たちにも、不平を鳴らすことはやめにしなさい。

## 第 12 章 偶像礼拝者こそ、真の神を礼拝する者を不当にも迫害している

私たちの話の主な内容を考えてごらんください。すなわち、私たちは何の罪もないのに、あなたがたは干渉し<sup>⑤</sup>、神を軽蔑し、神のしもべたちを攻撃し圧迫しています。あなたがたの生活は種々様々な、おびただしい悪で、死の罪に値する不正やあらゆる血なまぐさい略奪でけがれていること、そして真の宗教が迷信によって覆されていること、人々が神を全く求めもしなければ願ひもしないこと等々について、あなたはほとんど考えていません。これらすべての事柄の上に、あなたはさらに神のしもべを困らせ、主のみいつとその名に献身している者に、不当な迫害<sup>⑥</sup>を加えているのです。あなたは自分が神を礼拝しないだけではこと足りず、さらにその上、冒瀆の敵意をもって、神を礼拝する者を迫害しています。あなたは神を礼拝せず、またすべての者に神への礼拝を許しませんが、それに反して、愚かな偶像や人間の手で造った像や、そのほかの印や怪物などを敬う者たちは、あなたを喜ばせるのです。あなたを怒らせるのは、ただ真の神を礼拝する者だけです。あなたがたの神殿はいたる所に生贄の灰と牛とがうず高く重なっていますが、真の神の祭壇はどこにもないか、あるいは隠れた所にあります。あなたがたはワニや猿や石や蛇などを拝んでいます。地上における唯一の神だけは拝まないのです。拝めば罰せられるからです。あなたがたは罪のない、正しい、神に親しい者たちから家を奪うのです。あなたがたは彼らの土地を略奪し、鎖で縛り、牢獄に閉じ込め、剣と野獣と

火をもって彼らを罰するのです。

さらにあなたは、私たちの苦しみに耐える時間の短いことや、苦痛のためにすぐ倒れてしまうことには満足できず、私たちの体を引き裂く、長時間の拷問を始めました。あなたは私たちの体の方々をかき裂くという多くの罰を重ね加えました。ふつうの拷問では、あなたの残忍さと凶暴さを満足させることができませんでした。あなたの巧みな残忍さは、新しい苦痛の数々を工夫し作り出したのです。

### 第 13 章 自由に信仰告白をしている私を、なぜ拷問にかけないのか

この飽くことを知らない血なまぐさい狂乱、この果てし無い残酷な欲望は何事でしょうか？ あなたはむしろ二者択一をするほうがよいのです。すなわち、「キリスト教徒であることが罪なのですか？、それとも罪ではないのですか？」。もし罪だとしたら、なぜその信仰を告白した者を死刑にしないのですか？ もし罪でないなら、なぜ無実の者を迫害するのですか？ 私はそれを否めば、拷問にかけられるはずでした。私は、もしあなたの罰を恐れるところから、偽りの欺きをもって、自分が以前に何であったかを隠したり、あなたがたの神々を礼拝しなかったという事実を隠したりしていたなら、私は拷問にかけられていたでしょう。そして、自分が訴えられた罪を否認する他の者が、告訴された罪を自白するように拷問にかけられ、肉体の苦痛のために無理に承諾させられたのと同じように、私も苦痛の力によって<sup>㉔</sup> 自分の罪の自白を強いられたはずでした。しかし今私は自分の自由意志から告白し<sup>㉕</sup>、絶叫し、「私はキリスト教徒である」という同じ趣旨の証言を、言葉をもって何度でも繰り返します。あなたはなぜ秘密の所に隠れず、公に、公衆の面前で、市場の中で、あなたの長官や総督の聞いている所で、「あなたがたの神々を取り除く」と公言している者を、拷問にかけないのですか？ すなわち、前にいたる所で、自分がキリスト教徒であることを宣言し、周囲に立つ人々と共に、あなたやあなたがたの神々を認めないことを人々の前で公に宣言した<sup>㉖</sup> 私に対して、あなたの憎むべ

き、そしてさらにむごい罰を加えるべきこの私に対して、罪に定めるのはたやすいことではないのですか？

#### 第 14 章 あなたの礼拝する神々が偉大であるなら……

あなたはなぜ、私たちの肉体の弱さに目を付けたのですか？ なぜこの世の肉の弱さと戦うのですか？ むしろ心の強さと、戦ってごらん下さい！ 靈魂の力を、押し潰してみなさい！ 私たちの信仰を、壊してみなさい！ もし議論で征服し、理性で勝つことができるなら、やってみなさい！ あるいは、あなたがたの神々が神性と力を持っているというなら、自らそれを証明させてみなさい！ 自分の威光で、自分を守らせてみなさい！ 自分を礼拝しない者に復讐できない神々が、礼拝者を助けることができるのですか？

もし復讐する者が、復讐を受ける者よりも価値があるとしたら、あなたの方が自分たちの神々よりも、偉大な者です。そしてあなたの方が、自分の礼拝する神々よりも偉大であるなら、あなたはその神々を礼拝すべきではなく、かえって彼らから主人として恐れられ<sup>9</sup>、礼拝されるのが当然です。神々が傷つけられ（侮辱され）た時、あなたが彼らを擁護し守ったり、彼らが滅びる際に無言であった時、あなたが彼らを防御し守ったのです。あなたは、自分が守ってやった者（神々）を礼拝することを、恥とすべきです。自分が保護してやっている者（神々）から、保護を期待することを、恥とすべきです。

#### 第 15 章 あなたの神々にも審判の時が訪れ、すべてが明らかになる

ああ、あなたは、彼ら（神々）が、私たちに命じられ、精神的に鞭打たれ、自分の所有する体から言葉の拷問をもって<sup>10</sup> 追い出され、人の声と神の力にわめいたり、うめいたりしながら、さらに、鞭打ちと殴打を受けながら、やがて審判を受けることを、見るだけでも、聞くだけでも、してごらん下さい！ 来てごらん下さい、私たちの言うのが真実であることを、

認めなさい！そしてあなたがたは、自分たちの神々を礼拝すると言っているのですから、その礼拝する者たちを信じなさい！あるいは、もしあなたが自分自身をさえ信じるなら、今あなたの心を所有している彼（すなわち悪魔）、今無知の夜をもってあなたの心を暗くしている彼は、あなたのことをあなたに聞こえるように語るでしょう。あなたは、自分が懇願している者（神々）が、私たちに懇願し、あなたが恐れ敬っている者（神々）が、私たちを恐れているのを見るでしょう<sup>⑧</sup>。あなたは、自分が主として仰ぎ、敬っている者が、私たちの手の下に縛られて立ち、捕虜のように震えているのを見るでしょう。こうなったら、あなたはきっと、自分の誤りに、狼狽するでしょう。あなたがたは、自分たちの神々を見たり聞いたりしている時、私たちの質問がひとたび彼らの正体を暴露したなら、あなたの前でも、彼らの欺きと偽りを隠すことは不可能になるのです。

## 第 16 章 神を知るために、まず自分自身を知りなさい

それなのに、その心の鈍さは何事ですか？ そうです、暗闇を出て光に入ることを望まず、永遠の死のわなに縛られていながら、不死の希望を受け入れようともせず、神が「主ひとりのほか、神々に犠牲をささげる者は断ち滅ぼされる」（出 22, 20 参照）と脅かしておられるのに、神を恐れないのは何という愚かな盲目、つまらない狂気の沙汰でしょう！主はまた、こう言っておられます。「彼らは人々の指が造った者どもを拜んだ。人間は卑しめられ、人はだれも低くされた。神は彼らをお赦しにならないであろう。」（イザヤ 2, 8~9）。あなたは、なぜ自分を卑しめて、偽りの神々に<sup>⑨</sup>頭を下げるのですか？あなたは、なぜ馬鹿げた偶像や、地から生まれ出た物にとらわれて<sup>⑩</sup>、身をかがめる<sup>⑪</sup>のですか？神はあなたを直立するようにつくられました。しかしながら、他の動物は下を見て、地に押さえ込まれ、かがんだ姿勢<sup>⑫</sup>をしています。あなたの姿は気高く、あなたの姿勢は天に向かって直立しているのです。その彼方をごらんください！あなたの目を、彼方にむけなさい！いと高き所にいます神を求めなさい！

低い所の者から解放されるために、心はいと高き、天のものを求めなさい！ あなたは、なぜ自分が拝んでいる蛇と共に、自分の体を死の廃墟にひれ伏させるのですか？ あなたは、なぜ悪魔の手段により、またその仲間になって、その滅びの中に落ち込むのですか？ あなたが生まれたままの気高い財産を保ちなさい！ 神からつくられた通りのままでありなさい！ あなたの魂も、あなたの姿と体の姿勢の通りにしなさい！ 神を知ることができるようになるため、まず自分自身を知りなさい！ 人間の誤りが考え出した偶像を、捨てなさい！ あなたが嘆願すれば助けて下さる神に、立ち帰りなさい！ キリストを信じなさい！ キリストこそは、おん父が私たちを癒し復活させてくださるために遣わされた<sup>④</sup> お方なのです。神であるキリストのしもべたちを迫害し傷つけることをやめなさい！ 彼らが傷つけられれば、神の復讐が彼らを守るのです。

#### 第 17 章 種々の意外な出来事は偶然の出来事ではなく、神の復讐である

以上の理由から、私たちの仲間の数は多く、大勢いるにもかかわらず、誰一人、捕らえられても抵抗する者はなく、またあなたの不正な暴力に対して仕返しをする者もいないのです。神の復讐が必ずあるので、それを信じて忍耐しています。無実の者が罪に場所を譲り、無害の者が黙って罰と拷問を受けています。しかし、私たちが苦しんだこと、それが何であれ、復讐されずにおかれないのは、確実なことです。そして私たちを迫害した者の不義の大きさの程度に応じて、正確に、厳格な正義の復讐がその迫害者に報いを与えるのです。不信仰の悪が、私たちの信仰の名に反対したのに、天からただちにその復讐を受けることなく、永久に立つことは決してありません。昔の記憶に言及するまでもないことです。神を礼拝する者のために、しばしば起こった復讐のことを、言葉で思い出すまでもありません。現在の、今の瞬間のことだけで、私たちの守りがひじょうに素早く、力強く到来することは、近頃起こった物事（他書では「王たちの」とある）の没落<sup>⑤</sup>、富の破壊、兵力の喪失、市場の衰退などで十分証明されています。

誰もこのことは偶然に起こったことだと思ってはなりません。意外な出来事だと思ってはなりません。なぜならこれはずっと以前に「復讐は私のすること、わたしが報復する、と主は言われる」(申 32, 35=ロマ 12, 19)と、聖書に言われていることだからです。聖書はまた、あらかじめ警告してこう言っています。「私の敵に復讐したい、と言ってはならない。主に望みをおけ、主があなたを助けてくださる。」(箴 20, 22)。今起こりつつあるこれらの出来事はすべて、私たちによってではなく、私たちのために神の怒りが下って起こったものであることが、明らかに示されているのです。

### 第 18 章 未来によいものを確信する人々は、今の悪や苦しみに悩まない

しかし、キリスト教徒も、同じように訪れた災いの影響を受けているという理由で、彼らもそれによって復讐を受けているのだと、誰も考えてはなりません。すべての喜びと栄光がこの世にしかないとき、人間はこの世の不幸を罰だと感じます。こういう人々はこの世の生活が悪くなれば、苦しみ、うめきます。こういう人々にとって、この世の生活が終わったら良くなるということはありません、その人生の実りもこの世で受けなければならぬのです。そのすべての慰めはこの世で終わり、そのはかない短い命はこの世で多少の甘美さと楽しみを味わうが、この世を離れば残っているものは、悲しみと、それに加えて罰だけなのです。しかし、未来によいものを確信している人々は、現在の悪の攻撃に悩むことなどありません。実に私たちは決して災いに屈することなく、破れることなく、どんな外面的な不幸や肉体の弱さにも、嘆いたり、呟いたり<sup>99</sup> しないのです。私たちは肉によってよりも聖霊によって生かされ、精神の力をもって肉体の弱さを克服します。私たちは自分達を苦しめたり疲れさせたりするその事柄によって、証明され強められたことを知り、またそう信じているのです。

### 第 19 章 今の災いにあわてず、動揺しない理由

あなたは、同じ災いに対して、あなたがたと私たちとは忍耐の相違が

あるのを見て、私たちもあなたがたと同じように災いに苦しんでいるのだと思うのですか？ あなたがたの間では、いつも我慢ならない不平や眩きがあります。しかし私たちには、強い、宗教的な忍耐があり、常に静かで、いつも神に感謝しています。この世の楽しみや繁栄は、それ自体、その価値を宣言するものではありませんが、この肉体を持っている限り、必然的に他人との共通の運命を担い、確かに共通の肉体的条件を持っているのですから、この動揺する世界の突発事態に、すべて柔和と親切と落ち着きをもって対処し、神の約束の時を待っているのです。

また、この現在の生活から引退した者を除いては、あれこれと人々を分け隔てすることもありません。私たちは、この世にある間、すべて善人も悪人も、一つの家族の中にいるのです。この家の中で何が起こっても、私たちはこの仮の命の終わりが来るときまで、同じ運命に苦しむのです。しかし、その命が終わりに到達する時、私たちは「永遠の死」か、あるいは「不朽の命」に分けられるのです。私たちは、今、この世と肉体の絆のうちに置かれており、私たちもあなたがたと同じように、この世と肉の迷いを受けていますが、苦痛はすべて罪であると考えるあなたがたとは違って、その苦痛に苦しまないのです、あなたがたの罰を分け担う者ではないことは、明らかです。ですから、私たちはあなたがたと同じ水準にはおらず、同等の者ではないのです<sup>⑧</sup>。

## 第 20 章 この世の悪や不幸に耐える信仰と希望

私たちの内には、強い希望と確固たる信仰が生き生きとしています。この世の腐敗した廃墟の真っ直中で、私たちの靈魂は高められ、勇気は奮い立たされています。私たちの忍耐は、喜びにはほかなりません。聖霊が預言者を通して、私たちの希望と信仰とを神の言葉をもって固めるために語られた通り、神について、私たちの心は確かなのです。聖霊は言われます。「いちじくの木は実らず、ぶどうの枝も実をつけない<sup>⑨</sup>。オリーブは収穫の期待を裏切り、田畑は食物を<sup>⑩</sup> 産出しない。羊たちは檻からいなくなり、

牛舎には牛もいなくなる。しかし、私は主によって踊り、わが救いである神のゆえに喜ぶ」(ハバ3, 17~18)。神の人、神を礼拝する者、その希望と真実さに頼り、その信仰の堅固さの上に基礎を置く者は、この世とこの世の生活によってゆり動かされることはない、と主は言われます。たとえ、ぶどうの実が取れず、オリーブが敷き、早魃で畑が干上がり、草が枯れしぼんでも、キリスト教徒にとって、それが何でしょう？ 楽園に招かれている神の召使、すべて天国の恵みとその豊かさを待ち望んでいる者にとって、それが何でしょう？ 彼らはやがて来たるべき賜物と繁栄とを楽しみに待っているのです、常に主において喜び、神において楽しみ、この世の悪や不幸に勇敢に耐えているのです。

私たちも、この世の誕生を見捨てた者、そして今や聖霊によってつくられ新しく生かされた者、もはやこの世に生きず神に生きる者は、神のみまえに到達するまでは、その約束を受けないでしょう。しかもなお、敵の攻撃がなくなることや、雨が降ったりして災いがなくなるか、和らげられることを、私たちはいつも願っています。私たちは、絶えず、熱心に、夜も昼も祈って、神をなだめ、和らげ、あなたがたの上に平和と救いをお与えくださるよう懇願しています。

## 第21章 誰も自ら誇ってはならない

とは言え、誰も自ら誇ってはなりません。というのは、肉と体が同じであるという理由によって、この世の困難は、私たちの上にも冒瀆者の上にも、神礼拝者にも敵対者にも、現在同じように存在しているからです。このことから考えると、今起こっているこれらのことは、すべてがあなたがたによって引き起こされたものではありません。すでに、あらかじめ神ご自身の告知と預言者の証明によって、不義者の上に神の激怒が下るのであるということが語られています。すなわち、それは私たちを傷つける人間の迫害は欠けるところがないが、さらにその傷つけられた者の守りである復讐が、いずれ、彼らに必ず臨むということです。



## 第 22 章 審判の日に滅びることを免れる人々とは

それにまた、今私たちのために起こりつつあることは、何という大きなことでしょう！ あるものは神の怒りがいかに大きいかを示す事例として与えられたものです。しかし聖書の告げる「審判の日」はまだ来ていないのです。聖書はこう言っています。「泣き叫べ。主の日が近づく。神からの報いがやって来る。……見よ、主の日が来る。癒すことのできない怒りと憤りに満ちた日が来る。全地を荒廃させ、そこから罪人を絶つために。」（イザ 13, 6+9 参照）。また、こうも言っています。「見よ、炉のように燃えるその日が来る。異国生まれの者、悪を行う者はすべて<sup>わら</sup>藁のようになる。到来するその日は、彼らを燃え上がらせる、と万軍の主は言われる。」（マラ 4, 1）。高ぶる者は焼かれ滅び尽くされると、主は預言しておられます。すなわち、それは神の種族に背く者、冒瀆者、霊的に生まれ変わらない者、神の子どもとして造られない者のことです。主はまた他の所でも、この世の滅亡と人類のために天使が派遣されるとき、新たに生まれてキリストの印をもって印された者だけがそれを逃れることができると、言っておられます。すなわち、主は最後の日、さらに恐ろしい言葉をもって脅かしておられます。「お前たち、行って打殺せ。慈しみの目を注いではならない。憐れみをかけてはならない。老人も若者も<sup>⑧</sup>、おとめも子供も人妻も殺せ、滅ぼし尽くすために。しかし、あの印のある者にだけは触れてはならない。」（エゼ 9, 5~6 参照）。この印とは何でしょうか？ そして体のどこに印されているかについては、神は他の箇所を示しておられます。「エルサレムの中を巡り、その中で行われているあらゆる忌まわしいことのゆえに、嘆き悲しんでいる者たちの額に印をつけよ。」（エゼ 9, 4 参照）。そして、その印はキリストの受難と血に関係があり、この印のうちに発見された者は誰でも、安全は保たれ傷つけられないということも、神の証言をもって証明されているのです。「あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちの印となる。血を見たならば、私はあなたたちを守る。私がエジプトの国を撃つとき、滅びの災いはあなたたちには及ばない。」（出 12, 13 参照）。前に、

ほふられた小羊の姿で行われたことは、後に真理なるキリストにおいて成就したのです。だから、エジプト（人）が打たれたとき、ユデア人が小羊の血とその印によって逃れたように、この世が打たれ滅び始めるときは、キリストの血とその印のうちに見出される者だけが、逃れることができるのです。

### 第 23 章 たとえ遅ればせながらでも神を求めなさい

そういうわけで、真理と永遠の救いにいたる時間のある間に、よくごらんなさい！ そして今は、この世が切迫してきているので、神を恐れ、心を神に向けなさい！ この世で力のない、むなしい王国を、正義と平和以上に、喜んだりしてはなりません。畑の中でも、耕され穀物が実っている畑の中にも、毒麦の支配する所があります。また不幸な出来事は、「私たちがあなたがたの神々を礼拝しないことから起こった」などと、言うてはなりません。かえってこれは、まことの神の怒りの審判であることを知りなさい！ すなわち、その恩恵によって人から認められない神も、少なくともその審判によって認められるでしょう。たとえ遅くても、主を求めなさい。主はずっと以前から、あらかじめ預言者をもって戒め、すすめてこう言われました。「神を求めよ、そして生きよ。」（詩 68, 33＝アモス 5, 6）。遅ればせでもよいから、神を知るようにしなさい！ キリストはこの世に来られたとき、こう勧告し、教えて言われました。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」（ヨハ 17, 3）。偽ることのない主を信じなさい！ すべてこれらのことが起こるべきことを、あらかじめ語られた主を信じなさい！ すべて信じる者に、永遠の報いをお与えになる主を信じなさい！ すべて信じない者に、永遠のゲヘナの火の罰を下される主を信じなさい！

### 第 24 章 最後の時に迎える、信仰者の喜びと不信仰者の嘆き

では、その信仰の榮譽とは、何でしょうか？ 不信仰の罰とは、何でしょ

うか？ 審判の日が到来した時、信徒の喜びは、どんなでしょうか！ また、この世において信じようとせず、信ずるために再びこの世に戻ることのできない不信仰者の嘆きは、どんなでしょうか！ 消えることのないゲヘナの火は宣告された者を<sup>⑤</sup> 焼き、生きた炎は罰せられた者を滅ぼすのです。彼らの苦痛がやむとか、その終わりの時が来ることなど、全くないのです。霊魂も肉体と共に、終わることのない苦しみのうちにとどまるのです<sup>⑥</sup>。こうしてこの世でしばらくの間、私たちを見つめていた人々は、今度は、私たちから永遠に眺められるのです。私たちに与えた迫害を、残酷な目で見ていた束の間の喜びは、聖書の真理に従って、今度は、永遠の見世物となり、それを償わされるのです。聖書はこう言っています。「蛆は絶えず、彼らを焼く火は消えることがない。すべての肉なる者にとって彼らは憎悪的(erunt ad visionem universae carni)となる。」(イザ 66, 24 参照)。また、こうもあります。「その時(裁きの時)、正しい人々は、大いなる確信に満ちて、自分たちを虐げたり、その労苦をさげすんだ者どもの前に立つ。彼らはこれを見て大いなる恐れに捕らえられ、思いもよらぬ彼らの突然の救い<sup>⑦</sup>に茫然自失する。彼らは後悔して<sup>⑧</sup>、息もつまりながら、互いに嘆いて言う。『この者たちのことを、かつて我々はあざ笑い、軽蔑してきた。彼らの生き方(道)は思慮のない浅はかなものと考え、その死も誉れなしと我々は見なしていた。それがどうして、神の子らの一人と数えられ、聖人たちの仲間に加えられる境遇にあるのか。我々は真理の道を踏み外してしまった。義の光は我々の上には輝かず、太陽も我々のためには昇らなかったのだ。我々は不法と滅びの道をひたすら歩み続け、寂しい荒野を突き進んだ。主の道を知ることがなかったのだ。高慢は我々にとって何の役に立ったのだろうか。富のおごりは何をもたらしてくれたか。すべては影のように過ぎ去ってしまった。』」(知 5, 1~9 参照)。

そのとき、回心の実りを伴わない罰の苦痛があり、泣き悲しんでも無駄であり、嘆願しても、もう何の効果もないでしょう。永遠の命を信じたくなかった者が、永遠の罰を信じるようになって、もう手遅れなのです。

## 第 25 章 激励の言葉

それゆえ、あなたがたの安全と命のために、許されている間に、よく準備しなさい！ 私たちは救いに役立つ考えや助言を、あなたがたに提供します。私たちには憎むことがゆるされていないので、また不正に対して仕返しをしないことによって神をよりいっそうお喜ばせするので、私たちは、あなたがたが力を持っている間に、この世での生活に何か残っている間に、神と和解して、迷信の暗い淵より<sup>⑤</sup>、真の宗教の輝かしい光に向かって進むようにと激励します。私たちは、あなたがたの快適さを、羨ましく思ったりはしないし、神の恩恵を盗んだりもしません。私たちは、あなたがたの憎悪に対して<sup>⑥</sup> 親切をお返しします。私たちに課せられた拷問や罰のかわりに、私たちは救いへの道を指し示します<sup>⑦</sup>。どうか信じて下さい、そして生きてください！ あなたがたは、かつては私たちを迫害しましたが、永遠に私たちと共に喜んで下さい！ あなたがたは、かつてはそこから離れてしまいましたが、もはや回心のための余地はありません。神と和解する可能性も残されていません。今こそ、命は失われるか、保たれるかです。今こそ、神を礼拝することと信仰の実りによって、永遠の救いが整えられるのです。救いを得るために、誰も自分の罪に縛られたり、歳月を費やしたりはできません。この世に依然としてとどまっていたい人にも、回心はまだ遅くはないのです<sup>⑧</sup>。神の憐れみに近づくことは（できます）、まだ開かれたままです。真理を捜し求め、それを捕らえる人は、神に近づきやすいのです。生涯の終わりにあたって、人生の日没の時にあたって、唯一にして正しい方である神を認める信仰とその信仰告白によって、あなたの罪のゆるしを神に嘆願しなさい！ 信仰を告白する者には罪のゆるしが与えられ、信じる者には神の慈しみにより救いの恵みが与えられ、死そのものにおいては永遠の命へと移されて行くのです。この恵みをキリストがお与えになります。その憐れみの賜物を彼が私たちにお与えになるのです——すなわち、その十字架のトロフィーにおいて死に勝利することによって、

またその血の値によって信仰者を買戻すことによって、さらに父である神と人間を和解させることによって、天の再生によって私たちの死すべき性質をよみがえらせることによって……。もし、できるなら、私たちは皆キリストの後に従いましょう！ キリストの秘跡と印のもとに登録しましょう！ キリストは、私たちに命の道を開き、楽園へと連れ戻し、さらに天の国へと私たちを導いてくださいます。キリストによって神の子どもとなった私たちは、キリストと共に生きながらえるでしょう。キリストと共にいつも喜び、その血によって購われたのです。私たちキリスト教徒はキリストと共に栄光にあずかり、父である神に祝福され、神のおかげであることを感謝しながら、神のみまえで常に永遠の喜びを味わうでしょう。実に、不滅の命を確かなものにした死というものに赴いた者<sup>69</sup> 以外に、常に喜び感謝している者は、他に誰もいないのです。

(キュプリアヌス『デメトリアーヌスに送る——キリスト教弁明の書』おわり)

## 原注

Steph. Baluzius ステファノ・バルジウスによる「原注」合計 59 か所の翻訳および要約。(特に長文の場合、内容を簡潔に要約するにとどめた)

- ① 本書の題名は、ある写本によれば、*Incipit Epistola Sancti Cypriani ad Demetrianum Paganum Episcopum*. つまり、「聖キュプリアヌス著『異教徒・監督デメトリアーヌス宛書簡』の始め」とある。この人物については、ニコラス・ヴィグニクリウス *Nicolaus Vignierius* 著、*Historia Ecclesiastica* 『教会史』中に、彼はアフリカのプロコンスル *Proconsul* (地方総督) であったという記事がある。他書には、「カルタゴ市の裁判官」または「裁判に立ち会う顧問の一人」であったらしいという記述がある (57 行分の説明文要約)。
- ② *nec hoc sine magisterii divini*. 別書では、*et nominis* が追加され、「神の教えとその名名によらずしてそうしたのではない」となっている。
- ③ *inculcent*. 「押しつける」。この単語は古写本や 17 世紀の手書きの写本中に見受けられ、キュプリアヌスが頻繁に使用している (訳注。ウルガータ版では、*conculcent*

「踏みにじる。」)

- ④ et conversi elidant vos. 「そしてあなたがたを押し退ける」。いくつかの写本中に見受けられるが、多くの書には載っていない文章（訳注。ウルガータ版では、et conversi *dirumpant* vos. 「向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう。」)
- ⑤ patientia vici. 「忍耐をもって打ち勝つ」。この句はヒエロニムスがエルサレムのヨハネに反対して書いた書簡の中で、Injuriam patientia vicimus. 「我々は忍耐をもって不正に打ち勝ったのです」という表現で使っている。Cf. Hieronymus, in Epistola ad Pammachium.
- ⑥ quod bella crebrius. 「戦争がしばしば起こるようになってきたこと」。Cf. Prudentius, lib. II. adversus Symmachum.
- ⑦ imbres et pluvias. 「雹や大雨」。テオドシウス著『ユダヤ人とサマリア人』の中で、天候不順の記述がある。Cf. Theodosius, De Judaeis et Samaritanis.
- ⑧ serena longa. 「長い間の晴天」（訳注。「旱魃」の原因となる）。マタイ 16 章中、「夕焼けだから、晴れた」（マタイ 16, 2 参照）という表現がある。
- ⑨ verecundiae. 「慎み」。ヒエロニムスの著書中に言及箇所がある。Cf. Hieronymus, in Epistola ad Theophilum Alexandrinum.
- ⑩ respondeo. 「答える」（現在・1 人称・単数）という単語が、別書では、respondemus（現在・1 人称・複数）となっている。
- ⑪ quod dii vestri. 「あなたがたの神々……」。ラクタンチウスの著書中に「それゆえ、神々を礼拝している人々は、悪人であるということを知りなさい。」とある。Cf. Lactantius, lib. v. cap. 8: “Discite igitur homines ideo malos esse quia dii coluntur.”
- ⑫ vernante temperie. 「春には……」。この箇所は以前には、*verna de temperie sua sata laeta sunt*. と記載されていた。
- ⑬ arvis. 「畑」。ウルガータ版では、agris 「畑」という別な単語が使われている。本書では、多くの写本どおりにしてある。
- ⑭ juvena. 「青年時代」。別書では、juventute 「青春」という単語になっている。
- ⑮ quod minuantur singula. 「この世界が……衰えていくこと」。同じような出来事は、キリスト教がローマにおいて確立する以前にもあったことは確実であり、容易に証明できる（説明文 47 行分の要約）。
- ⑯ aetas incipit a senectute. 「年令は老人から始まる」という表現や考え方は、セネカやキケロ、タキトゥスなどの著書中にも出てくる。たとえば、セネカの場合。“Quid est autem turpius quam senex vivere incipiens?” 「年寄りが生きることを始める以上に見苦しいことがあろうか？」 Cf. Seneca, Epistola. 13.
- ⑰ Deus omnino nec quaeritur. 「どんな方法をもってしても神を求めない」という文章中、別書では、動詞が、colitur 「礼拝しない」という単語になっている。
- ⑱ nec voluerunt accipere. 「彼らは懲らしめを受け入れようとはのぞまず」。この

箇所には、別書では、*nec voluerunt credere nec accipere disciplinam.* とあり、*credere* 「信じること」が追加されている。

- ⑲ *facinorum impunitate.* 「そのような罪が罰せられず……」。 *impunitas* についてキケロの言葉が掲載されている。 Cf. Cicero, in *Oratione pro Milone.*
- ⑳ *tu enim Deo servis.* 「あなたは……神に仕えました」。別書には、*Deo non servis.* または、*Domino non servis.* 「あなたは……神（主）に仕えていません」という文もある。
- ㉑ *famularis.* 「あなたは……奉仕しました」。別書には、*non famularis.* 「あなたは……奉仕していません」とある。
- ㉒ *animarum ratio communis.* 「霊魂には共通の秩序がある」。
- ㉓ *ipse dominatum.* 「主人の権利」。別書では、*in homine.* または *in hominem.* 「人の上に」とある。
- ㉔ *manet postmodum.* 「(永遠の牢獄が)……残されるだけです」。別書には、*manet ergo necesse est postmodum.* という表現になっている。
- ㉕ *cum volucribus.* 「鳥と共に」。別書では、*cum volucribus et volatilibus.* 「鳥と空を飛ぶものと」となっている。
- ㉖ *et irasci.* 「憤る」。この単語が欠落している写本もあるが、本書では、少し前の箇所(第7章の冒頭)で *Cyberia* 自身が、*indignatur ecce Dominus et irascitur.* 「ごらんなさい。主は怒り、憤り……」と書いているのでそのまま掲載している。
- ㉗ *metus.* 「恐れ」。別書には、*locus vel pudor.* とか *pavor.* とか *metus et pudor.* とある(説明文8行分の要約)。
- ㉘ *in paenas.* 「罰」。別書には、*in plagas.* とある。すぐ前の箇所にも、*magis et magis in plagas generis humani censuram Dei indignantis accendi.* という文章があった。
- ㉙ *sterilitate ac fame.* 「不作と飢饉」。 Cf. Prudentius, lib. II. *Adversus Symmachum.*
- ㉚ *nulla cunctatio.* 「手間どることもない」。別書には、*nulla formido est.* とか *trepidatio nulla.* という記載もあるが、本書では採用していない(説明文18行分の要約)。
- ㉛ *venerunt iudicaturi.* 「裁判をする者が売り物になっています」。別書では、*veniunt* 「やって来ます」となっており、最近の版では後者を採用している。
- ㉜ *unde nobis vobiscum.* 「あなたがたは私たちに……干渉する」。別書には、*unde nobiscum maxime sermo est.* とある。
- ㉝ *persecutionibus fatigatis.* 「不当な迫害を……」。別書には、*flagitatis.* とある。
- ㉞ *dolore corporis exprimatur.* 「体の苦痛の力によって……強いられる」。苦痛に関する種々の関連文献を紹介している(説明文28行分の要約)。たとえば、*Cyber*

リアヌス著『偶像のむなしさについて』（仮訳）の中で、*Dolor, qui veritatis testis, admovetur.* 「真理の証人である苦痛は誘導される」と述べている。Cf. *Cyprianus, De Vanitate Idolorum.* p. 228.

- ③⑤ *cum sponte confitear.* 「私たちは自分の自由意志から告白します」。Cf. *Cicero, in Oratione pro Milone.* “*Id quod tormentis invenire vis id fateor.*”
- ③⑥ *praedicatione.* 「宣言」。別書には、*praeconatione* 「公布」とある。
- ③⑦ *timeri ut dominus.* 「主人として恐れられる」。主人と奴隷の関係について、関連文献を多数紹介（説明文 41 行分の要約）。たとえば、ヒエロニムスの著作の中で、*amare filiorum, timere servorum est.* 「愛することは息子の特徴、恐れるのは奴隷の特徴」と述べている。Cf. *Hieronymus, in Epistola ad Nepotianum de Vita Clericorum.*
- ③⑧ *verborum tormentis.* 「言葉の拷問をもって」。ペトロニウスには、*“fabulosum sententiarum tormentum.”* 「言葉による、でっちあげの拷問」という記述がある。
- ③⑨ *quos tu times.* 「あなたが恐れている者たちを」。この文章は多くの写本に欠落しているが、その理由はわからない。
- ④⑩ *qui te ad falsos deos.* 「いつわりの神々に……」。別書には、*falsas imagines.* 「いつわりの像に……」とある。
- ④⑪ *captivum.* 「虜となって」。別書には、*captiva.* とあるが、本書のほうが正しい。
- ④⑫ *incurvas.* 「身をかがめる」。別書には、*inclinās.* 「傾いた」とある。
- ④⑬ *animalia prona.* 「かがんだ動物たち」。オヴィディウスやキケロ等の文献紹介（説明文 17 行分の要約）。
- ④⑭ *pater misit.* 「おん父が……遣わした」。別書には、*pater Filium misit.* 「おん父はおん子を遣わした」とある。
- ④⑮ *ruinis rerum.* 「物事の没落」。別書には、*~regum.* 「王たちの～」とある（説明文 34 行分の要約）。
- ④⑯ *mussitamus.* 「呟く」。別書では、*musitamus.* とある（説明文 12 行分の要約）。
- ④⑰ *videas aequalitate.* 「あなたは同じ水準で……」。別書には、*aequaliter.* と副詞が記載されている（説明文 11 行分の要約）。
- ④⑱ *non erunt nascentia.* 「（ぶどうの木には）実がならず」。別書には、*non erit generatio.* とある（説明文 11 行分の要約）。
- ④⑲ *cibum.* 「食物」。別書には、*frumentum* 「穀物」とある。
- ⑤⑩ *senioris aut juvenis.* 「年寄りも若者も」（属格）。別書には、*seniori aut juveni.* （与格・単数）とか、*senioribus atque junioribus.* （与格・複数）、さらに、*seniorum neque juvenum et virginum.* 「年寄りも若者もおとめも」（属格・複数）という記載もある。
- ⑤⑪ *addictos.* 「宣告された者を」。ここでは、断罪されたユダヤ人を指している（説明文 13 行分の要約）。



- ⑤② *servabuntur cum corporibus*. 「(靈魂も) 肉体と共に……とどまる」。Cf. *Salvianus, De Gubernatione Dei*.
- ⑤③ *subitatione*. 「思いがけない……」。キュプリアヌス著『フォルトゥナトゥスに送る——殉教のすすめについて』(『南山神学』第21号, 115~158頁, 1998年2月, に全訳掲載)にも同じ表現が使われている。
- ⑤④ *paenitentiam habentes*. 「後悔して」。ウルガータ版では, *~agentes*. となっている箇所, キュプリアヌス著『フォルトゥナトゥスに送る——殉教のすすめについて』(『南山神学』第21号, 115~158頁, 1998年2月, に全訳掲載, 第12章参照)にも同じ表現が見受けられる。
- ⑤⑤ *de profundo*. 「深淵より」。別書には, *de profunda et tenebrosa nocte superstitionis*. 「迷信の深くて暗い夜」となっている。
- ⑤⑥ *odiis vestris*. 「あなたがたの憎しみによって」。
- ⑤⑦ *salutis itinera monstramus*. 「救いの道を指し示します」。Cf. *Hieronymus, in Epistola ad Pammachium*.
- ⑤⑧ *paenitentia nulla sera*. 「回心は決して遅くはない」。Cf. *Hieronymus, in Epistola ad Laetam de Iustitione filiae*: “nunquam est sera conversio.” 「改心は決して遅くはない」他, 引用文等15行掲載。
- ⑤⑨ *factus est*. 「(確実な者となった)」。1冊を除き, 他のすべての写本には, *factus est* と。ただ, *Gravius* 版だけには, *factus est ex immortalitate securus*. 「不滅によって確実な者となった」とある。

(以上, 「原注」59箇所おわり)